

幼児期における情動発達の特徴—年齢と性による違い—

平川 久美子¹・本郷 一夫²・飯島 典子³・高橋 千枝⁴

Emotional Development in Young Children: Focusing on Age and Sex Differences

Kumiko HIRAKAWA, Kazuo HONGO, Noriko IJIMA, Chie TAKAHASHI

¹*Department of Human Education, Faculty of Human Studies,
Ishinomaki Senshu University, Miyagi 986-8580, Japan*

²*AFL Development Support Laboratory, Miyagi 989-3206, Japan*

³*Faculty of Education, Miyagi University of Education, Miyagi 980-0845, Japan*

⁴*Department of Education, Faculty of Letters, Tohoku Gakuin University,
Miyagi 980-8511, Japan*

1. 問題と目的

私たちは日々、喜びや悲しみ、怒りなど様々な情動を経験しながら生活している。情動は自分にとって重要な事柄について、自分と自分を取り巻く環境との関係を確立したり、維持したり、変化させたりする機能を果たしているとされており (Campos, Campos, & Barrett, 1989)、私たちが他者と良好な関係を構築し、適応して生活していく上で非常に重要な役割を果たしている。

情動の発達をどのように捉えるか、情動の何が発達するのかということに関しては様々な考え方がある。その一つとして、年齢が上がるにつれて様々な情動を経験するようになるというように「情動のレパートリーの増加」として情動の発達を捉える考え方がある。たとえば、Lewis (1993) は成人の情動の大部分が出現し、発達する時期である生後3年間の情動発達を示しており、生後6か月頃までに一次的情動である喜び、驚き、悲しみ、嫌悪、怒り、恐れが現れ、1歳半を過ぎて自己意識が発達すること二次的情動であるてれや共感、誇りや恥などが生じるとしている。

一方、情動の発達を「情動に関する知識やスキルの獲得」として捉えるという考え方もある。こ

れは、どのような場面でどのような情動を経験し、その情動をどのように表現するのか、他者の情動をどのように理解するのかなど、社会の中で生活していくために必要とされる情動に関する様々な知識を獲得すること、そしてそれを適切に使用することができるようになっていくことを情動の発達とするものである。このような情動に関する知識やスキルは、情動知性 (emotional intelligence) や情動コンピテンス (emotional competence) という概念で説明されている。たとえば、Denham et al. (2003) は就学前の子どもが既に獲得している情動コンピテンスの要素として、「情動の表出性」「情動の知識」「情動制御」の3つを挙げており、このような情動コンピテンスが社会的コンピテンスを準備することを示している。また、情動コンピテンスの個人差が社会的な適応、仲間からの需要、人気などに影響すること (Manstead & Edwards, 1992) なども踏まえると、幼児期から情動理解や情動表出、情動制御など私たちが他者と関わり、良好な関係を構築していく上で必要とされる知識やスキルを発達させていくことが、対人関係の中で適応して生活していくことにつながると言える。

¹石巻専修大学人間学部人間教育学科

²AFL 発達支援研究所

³宮城教育大学教育学部

⁴東北学院大学文学部教育学科

情動知性や情動コンピテンスに示されているような情動に関する様々な知識やスキルは、幼児期において顕著に発達することが多くの研究によって示されている。幼児期における情動の理解に関する研究では、加齢に伴って情動の理解が発達することが示されている（渡辺・瀧口、1985；森野、2005）。また、保育者を対象とした質問紙調査を行った本郷ほか（2015）では、各項目において半数以上の子どもが「できる」と回答されるようになる年齢を調べたところ、「怒っているなど自分の感情を言葉で表せる」「いやなことをされても気持ちを抑えて『やめて』と言える」は3歳台、「かわいそうな話を聞くと悲しそうにする」は4歳台であった。したがって、情動の表現や情動の抑制、共感などについても、幼児期において顕著に発達すると考えられる。

一方、幼児期における情動発達には、年齢による発達の変化だけでなく性差を指摘する研究もある。たとえば、幼児を対象として人形劇の登場人物の気持ちについて尋ねた仲（2010）の研究では、登場人物の気持ちや感情などの内的状態に関わる表現は、男児よりも女児のほうが多くみられることが明らかになっている。また、富田（2017）では、男児よりも女児のほうが恐怖対象をもつ傾向にあることが示されている。さらに、必ずしも情動を対象としたものではないが、幼児の社会的スキルに関する研究では、「主張性」「協調性」「自己統制」の得点が男児よりも女児のほうが高いことも明らかになっている（清水ほか、2015）。

以上のことから、幼児期における情動発達の特徴を明らかにする上では、年齢差だけでなく性差も考慮する必要があると考えられることから、本研究では幼児期における情動発達の特徴、とりわけ年齢と性による違いを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象

保育所および認定こども園のクラス担任に、クラスに在籍しているすべての子ども（障害児保育の対象児は除く）について評定を求めた。本研究では回収された1068名（4歳児352名、5歳児381名、6歳児335名；男児526名、女児542名）

を分析の対象とした。

(2) 調査時期

調査は2019年1月から2月に行われた。

(3) 手続き

各園に「情動表現に関するアンケート」および「行動特性に関するアンケート」を配布し、各クラス担任にクラスに在籍している全ての子どもについてアンケートに回答するよう求めた。「情動表現に関するアンケート」では、本郷・平川・飯島・高橋・相澤（2020）の〈表情による表現〉〈言葉による表現〉〈抑制〉〈誇り・恥〉〈理解〉〈共感〉〈過敏さ〉の7領域20項目を用いて、「全くない」(1)から「よくある」(5)の5段階で回答してもらった。「行動特性に関するアンケート」では、本郷ほか（2020）で用いられた「気になる」児童の行動特徴に関する項目（17項目）を幼児の生活場面に合うように表現を修正して用いて、「全くない」(1)から「よくある」(5)の5段階で回答してもらった。これらの結果のうち、本研究では「情動表現に関するアンケート」の結果についてのみ報告する。

なお、本研究は、第2著者の所属していた大学の研究倫理審査委員会の審査・承認を得て実施された（研究倫理審査承認番号：教研倫第18-1-034）。

3. 結果

(1) 領域別の情動得点

各項目の得点を領域ごとにまとめて分析するにあたり、各領域に含まれる項目間の相関係数を算出した。その結果、いずれの領域においても有意な正の相関がみられた（表情による表現：.53～.70；言葉による表現：.57～.75；抑制：.54～.78；誇り・恥：.31；理解：.79～.91；共感：.72～.88；過敏さ：.43～.79）。したがって、ここでは各領域の項目の平均得点を領域別の情動得点として分析を行うこととした。

領域別の情動得点について、3（年齢群）×2（性）の2要因の分散分析を行った。その結果、〈理解〉を除いた6つの領域において年齢群の主効果がみられ、〈表情による表現〉〈言葉による表現〉〈過敏さ〉の得点は5歳・6歳よりも4歳のほうが有意に高かった。また、〈抑制〉〈誇り・恥〉の得点は

Table 1 各領域の情動得点および分散分析の結果

	4 歳	5 歳	6 歳	男児	女児	主効果		
	n=352	n=381	n=335	n=526	n=542	年齢群	性	
	平均値	平均値	平均値	平均値	平均値	F 値	F 値	
表情による表現	4.32 (0.76)	4.02 (0.71)	4.03 (0.78)	4.12 (0.77)	4.13 (0.76)	17.56***	4 > 5・6	
言葉による表現	4.02 (0.94)	3.78 (0.82)	3.84 (0.83)	3.86 (0.87)	3.90 (0.87)	7.20**	4 > 5・6	
抑制	2.44 (0.74)	2.74 (0.78)	2.65 (0.83)	2.55 (0.78)	2.67 (0.80)	13.56***	4 < 5・6	6.02* 男<女
誇り・恥	3.65 (0.85)	3.81 (0.74)	3.81 (0.63)	3.76 (0.80)	3.76 (0.71)	5.29**	4 < 5・6	
理解	3.90 (0.88)	3.78 (0.74)	3.91 (0.72)	3.72 (0.81)	3.99 (0.74)			33.43*** 男<女
共感	3.15 (0.91)	3.31 (0.89)	3.30 (0.73)	3.10 (0.82)	3.40 (0.85)	3.96*	4 < 5	33.72*** 男<女
過敏さ	2.77 (0.99)	2.57 (0.95)	2.55 (0.83)	2.59 (0.91)	2.67 (0.96)	6.31**	4 > 5・6	

注. () 内は SD。

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 2 年齢群・性別の各領域の情動得点

	4 歳		5 歳		6 歳	
	男児 n=180	女児 n=172	男児 n=190	女児 n=191	男児 n=156	女児 n=179
	平均値	平均値	平均値	平均値	平均値	平均値
表情による表現	4.31 (0.79)	4.33 (0.72)	4.04 (0.68)	4.01 (0.75)	4.01 (0.81)	4.06 (0.76)
言葉による表現	3.98 (0.96)	4.05 (0.93)	3.79 (0.77)	3.78 (0.86)	3.80 (0.87)	3.89 (0.80)
抑制	2.46 (0.73)	2.42 (0.76)	2.62 (0.75)	2.84 (0.80)	2.55 (0.88)	2.73 (0.78)
誇り・恥	3.63 (0.89)	3.67 (0.81)	3.81 (0.78)	3.81 (0.71)	3.83 (0.68)	3.79 (0.59)
理解	3.82 (0.90)	3.97 (0.86)	3.64 (0.75)	3.91 (0.71)	3.69 (0.76)	4.10 (0.63)
共感	3.08 (0.86)	3.21 (0.96)	3.14 (0.89)	3.49 (0.85)	3.08 (0.68)	3.49 (0.71)
過敏さ	2.76 (0.99)	2.78 (1.00)	2.47 (0.84)	2.67 (1.04)	2.54 (0.86)	2.55 (0.81)

注. () 内は SD。

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

4 歳よりも 5 歳・6 歳のほうが有意に高く、〈共感〉の得点は 4 歳よりも 5 歳のほうが有意に高かった。さらに、〈抑制〉〈理解〉〈共感〉においては性の主効果がみられ、いずれの得点も男児よりも女児のほうが有意に高かった。なお、いずれの領域

においても年齢群と性の交互作用はみられなかった。Table 1 には各領域の情動得点および分散分析の結果を、Table 2 には年齢群・性別の各領域の情動得点を示した。

(2) 項目別の情動得点

領域別の情動得点と同様に、項目別の情動得点についても 3 (年齢群) × 2 (性) の 2 要因の分散分析を行った。その結果、怒りと悲しみの表現の項目 (E2、E3、E5、E6) および過敏さの項目 (E18、E20) では年齢群の主効果がみられ、いずれの得点も 5 歳・6 歳よりも 4 歳のほうが有意に高かった。また、悲しみの抑制 (E9) や誇り (E10)、喜びの共感 (E15) の項目においても年齢群の主効果がみられ、いずれの得点も 4 歳よりも 5 歳・6 歳のほうが有意に高かった。さらに、喜びの表情表現 (E4) や悲しみの抑制 (E9)、理解 (E12、E13、E14)、喜びの共感 (E15)、過敏さ (E18) の項目では性の主効果がみられ、いずれの得点も男児よりも女児のほうが有意に高かった。年齢群と性の交互作用がみられたのは怒りの抑制 (E8)、怒りの共感 (E16)、悲しみの共感 (E17) の項目であり、いずれの得点も 5 歳・6 歳においてのみ男児よりも女児のほうが有意に高く、女児においてのみ 4 歳よりも 5 歳・6 歳のほうが有意に高かった。

幼児期における情動発達の特徴—年齢と性による違い—

Table 3 各項目の情動発達得点および分散分析の結果

	4 歳	5 歳	6 歳	男児	女児	主効果		
	n=352	n=381	n=335	n=526	n=542	年齢群		性
	平均値	平均値	平均値	平均値	平均値	F 値		F 値
E1 喜んでいることを表情で表現する	4.45 (0.72)	4.34 (0.68)	4.37 (0.72)	4.37 (0.73)	4.41 (0.69)			
E2 怒っていることを表情で表現する	4.17 (0.99)	3.79 (1.01)	3.83 (1.06)	3.94 (1.04)	3.91 (1.03)	15.14***	4 > 5・6	
E3 悲しんでいることを表情で表現する	4.33 (0.85)	3.94 (0.85)	3.90 (0.96)	4.06 (0.90)	4.06 (0.91)	24.82***	4 > 5・6	
E4 喜んでいることを言葉で表現する	4.26 (0.87)	4.14 (0.81)	4.27 (0.83)	4.16 (0.87)	4.28 (0.80)			6.11* 男<女
E5 怒っていることを言葉で表現する	3.94 (1.10)	3.61 (1.06)	3.73 (1.07)	3.77 (1.07)	3.74 (1.09)	8.78***	4 > 5・6	
E6 悲しんでいることを言葉で表現する	3.84 (1.15)	3.59 (1.00)	3.53 (1.03)	3.63 (1.05)	3.68 (1.08)	8.41***	4 > 5・6	
E7 うれしい気持ちを抑える	2.26 (0.79)	2.42 (0.97)	2.40 (1.03)	2.33 (0.92)	2.40 (0.95)			
E8 怒っている気持ちを抑える	2.52 (0.89)	2.89 (0.91)	2.73 (0.96)	2.63 (0.94)	2.81 (0.92)	15.36***		9.09**
E9 悲しい気持ちを抑える	2.54 (0.85)	2.90 (0.86)	2.81 (0.90)	2.69 (0.88)	2.81 (0.88)	16.48***	4 < 5・6	4.70* 男<女
E10 自分ができることに誇りをもっている	3.91 (0.99)	4.12 (0.80)	4.20 (0.76)	4.04 (0.89)	4.11 (0.83)	10.32***	4 < 5・6	
E11 自分ができないことを恥じている	3.39 (1.06)	3.50 (1.03)	3.41 (0.90)	3.47 (1.04)	3.40 (0.96)			
E12 友だちのうれしい気持ちがわかる	4.01 (0.86)	3.95 (0.74)	4.01 (0.73)	3.87 (0.82)	4.11 (0.73)			27.34*** 男<女
E13 友だちの怒っている気持ちがわかる	3.84 (0.94)	3.72 (0.81)	3.87 (0.79)	3.67 (0.88)	3.93 (0.81)			26.38*** 男<女
E14 友だちの悲しい気持ちがわかる	3.83 (0.94)	3.67 (0.86)	3.85 (0.78)	3.62 (0.88)	3.93 (0.82)	4.83**	4・6 > 5	35.45*** 男<女
E15 友だちのうれしい気持ちを自分のことのように感じる	3.42 (1.00)	3.59 (0.89)	3.62 (0.82)	3.39 (0.91)	3.69 (0.88)	4.70**	4 < 5・6	27.16*** 男<女
E16 友だちの怒っている気持ちを自分のことのように感じる	2.97 (0.96)	3.13 (0.95)	3.11 (0.82)	2.93 (0.88)	3.22 (0.93)	3.26*		27.57***
E17 友だちの悲しい気持ちを自分のことのように感じる	3.05 (0.98)	3.21 (1.01)	3.17 (0.81)	2.98 (0.89)	3.30 (0.97)			30.87***
E18 ちょっとしたことで怖がる	2.85 (1.18)	2.64 (1.12)	2.50 (1.01)	2.57 (1.08)	2.76 (1.14)	9.10***	4 > 5・6	8.77** 男<女
E19 ちょっとしたことで嫌な顔をする	2.76 (1.14)	2.62 (1.09)	2.71 (1.15)	2.70 (1.13)	2.69 (1.12)			
E20 ちょっとしたことで驚く	2.70 (1.13)	2.45 (1.04)	2.42 (0.95)	2.50 (1.05)	2.55 (1.05)	7.68***	4 > 5・6	

注. () 内はSD。

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 4 年齢群・性別の各項目の情動得点および分散分析の結果

	4 歳		5 歳		6 歳		交互作用
	男児 n=180	女児 n=172	男児 n=190	女児 n=191	男児 n=156	女児 n=179	
	平均値	平均値	平均値	平均値	平均値	平均値	F 値
E1 喜んでいることを表情で表現する	4.47 (0.75)	4.44 (0.69)	4.32 (0.68)	4.36 (0.69)	4.31 (0.75)	4.42 (0.69)	
E2 怒っていることを表情で表現する	4.13 (1.05)	4.22 (0.92)	3.84 (0.96)	3.73 (1.06)	3.85 (1.09)	3.82 (1.04)	
E3 悲しんでいることを表情で表現する	4.33 (0.86)	4.33 (0.84)	3.96 (0.80)	3.93 (0.89)	3.87 (0.98)	3.93 (0.94)	
E4 喜んでいることを言葉で表現する	4.24 (0.89)	4.29 (0.86)	4.10 (0.80)	4.18 (0.82)	4.14 (0.93)	4.39 (0.71)	
E5 怒っていることを言葉で表現する	3.91 (1.14)	3.98 (1.06)	3.67 (1.00)	3.55 (1.11)	3.74 (1.08)	3.71 (1.07)	
E6 悲しんでいることを言葉で表現する	3.80 (1.17)	3.88 (1.13)	3.58 (0.95)	3.60 (1.05)	3.51 (1.00)	3.56 (1.05)	
E7 うれしい気持ちを抑える	2.26 (0.78)	2.27 (0.80)	2.35 (0.92)	2.49 (1.02)	2.37 (1.06)	2.42 (1.01)	
E8 怒っている気持ちを抑える	2.58 (0.90)	2.46 (0.87)	2.72 (0.92)	3.06 (0.88)	2.58 (1.00)	2.87 (0.91)	6.73** 女：4 < 5・6 5・6：男 < 女
E9 悲しい気持ちを抑える	2.55 (0.84)	2.52 (0.87)	2.81 (0.85)	2.98 (0.87)	2.71 (0.96)	2.90 (0.84)	
E10 自分ができていることに誇りをもっている	3.85 (0.99)	3.98 (0.98)	4.12 (0.83)	4.13 (0.77)	4.18 (0.79)	4.22 (0.73)	
E11 自分ができないことを恥じている	3.41 (1.09)	3.36 (1.02)	3.51 (1.06)	3.49 (1.01)	3.48 (0.96)	3.35 (0.84)	
E12 友だちのうれしい気持ちがわかる	3.94 (0.88)	4.08 (0.84)	3.83 (0.76)	4.07 (0.70)	3.82 (0.80)	4.18 (0.63)	
E13 友だちの怒っている気持ちがわかる	3.77 (0.95)	3.92 (0.93)	3.61 (0.83)	3.83 (0.79)	3.64 (0.84)	4.06 (0.69)	
E14 友だちの悲しい気持ちがわかる	3.76 (0.96)	3.91 (0.93)	3.50 (0.86)	3.83 (0.82)	3.62 (0.81)	4.06 (0.70)	
E15 友だちのうれしい気持ちを自分のことのように感じる	3.32 (0.98)	3.52 (1.01)	3.38 (0.90)	3.79 (0.83)	3.48 (0.84)	3.74 (0.79)	
E16 友だちの怒っている気持ちを自分のことのように感じる	2.92 (0.90)	3.02 (1.01)	2.99 (0.96)	3.28 (0.92)	2.86 (0.76)	3.34 (0.81)	3.60* 女：4 < 5・6 5・6：男 < 女
E17 友だちの悲しい気持ちを自分のことのように感じる	3.01 (0.92)	3.09 (1.05)	3.03 (0.97)	3.39 (1.02)	2.90 (0.75)	3.41 (0.79)	4.72** 女：4 < 5・6 5・6：男 < 女
E18 ちょっとしたことでも怖がる	2.81 (1.18)	2.90 (1.19)	2.46 (1.01)	2.82 (1.21)	2.42 (1.00)	2.58 (1.01)	
E19 ちょっとしたことでも嫌な顔をする	2.76 (1.15)	2.77 (1.13)	2.63 (1.06)	2.62 (1.12)	2.72 (1.18)	2.70 (1.12)	
E20 ちょっとしたことでも驚く	2.72 (1.16)	2.69 (1.09)	2.32 (0.95)	2.58 (1.12)	2.47 (1.01)	2.38 (0.91)	

注. () 内は SD。

 注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 5 情動領域間の相関係数 (全体)

領域	1	2	3	4	5	6	7
1. 表情による表現	—						
2. 言葉による表現	.791**	—					
3. 抑制	-.330**	-.306**	—				
4. 誇り・恥	.345**	.355**	.048	—			
5. 理解	.366**	.423**	.018	.385**	—		
6. 共感	.295**	.386**	.020	.376**	.695**	—	
7. 過敏さ	.281**	.266**	.044	.234**	.142**	.155**	—

注. ** $p < .01$

Table 6 情動領域間の相関係数 (年齢群別)

領域	1	2	3	4	5	6	7
1. 表情による表現	—						
2. 言葉による表現	.824** .770** .774**	—					
3. 抑制	-.305** -.331** -.299**	-.332** -.328** -.221**	—				
4. 誇り・恥	.419** .362** .290**	.432** .329** .328**	.012 .009 .095	—			
5. 理解	.505** .330** .240**	.551** .403** .256**	-.016 -.005 .110	.564** .342** .163**	—		
6. 共感	.436** .303** .190**	.498** .428** .220**	-.079 -.019 .142**	.526** .300** .208**	.674** .756** .684**	—	
7. 過敏さ	.285** .315** .195**	.273** .340** .134*	.078 .007 .108*	.305** .314** .049	.234** .194** -.074	.217** .233** -.021	—

注. 上段は4歳、中段は5歳、下段は6歳。

注. * $p < .05$, ** $p < .01$

た。Table 3 には各項目の情動得点および分散分析の結果を、Table 4 には年齢群・性別の各項目の情動得点および分散分析の結果を示した。

(3) 情動領域間の関係

情動の領域間の関係を明らかにするために、情動領域間の相関係数を算出した (Table 5)。その結果、多くの領域間において有意な正の相関がみられたが、とりわけ相関が高かったのは〈表情による表現〉と〈言葉による表現〉との間 ($r=.791$) および〈理解〉と〈共感〉との間 ($r=.695$) だった。

また、有意な負の相関がみられたのは〈抑制〉と〈表情による表現〉との間 ($r=-.330$) および〈抑制〉と〈言葉による表現〉との間 ($r=-.306$) のみだった。さらに、〈抑制〉と〈誇り・恥〉〈理解〉〈共感〉〈過敏さ〉との間では有意な相関はみられなかった。なお、Table 5 の一部のデータは本郷・平川・高橋・飯島 (2021) において既に報告されている。

次に、情動の領域間の関係が年齢によってどのように異なるかを明らかにするために、年齢群ごとに情動領域間の相関係数を算出した (Table 6)。その結果、〈理解〉と〈表情による表現〉〈言葉による表現〉〈誇り・恥〉との間の相関はいずれの年齢群においても有意ではあったものの、年齢が上がるにつれて相関係数の値が小さくなっていった。同様の傾向は、〈共感〉と〈表情による表現〉〈言葉による表現〉〈誇り・恥〉との間においてもみられた。

4. 考察

本研究では幼児期における情動発達の特徴、とりわけ年齢と性による違いを明らかにすることを目的とした。

(1) 年齢による情動発達の違い

Table 1 からわかるように、幼児は4歳から5歳にかけて、①自分の情動をより抑制すること、②誇りや恥をより感じるようになること、③他児の情動により共感すること、④自分の情動を表情や言葉であまり表現しなくなること、⑤過敏さが減少することが明らかになった。また、Table 3 からわかるように、情動の表現のなかでも、とりわけ怒りや悲しみといった否定的情動について、4歳から5歳にかけて表情や言葉であまり表現しなくなることとも示された。4歳から5歳にかけて情動を抑制するようになるという本研究の結果を踏まえると、状況に応じて情動を抑制するようになるのに伴って、自分の情動を表情や言葉であまり表現しなくなっていくと考えられる。このことは、Table 5 の情動領域間の相関において情動の抑制と情動の表現との間に有意な負の相関がみられていることとも関連していると考えられる。

また、情動の表現は情動の理解や共感との間に

有意な正の相関がみられており、他児の情動を理解している子どものほうが、また他者の情動に共感する子どものほうが、情動をより表現することも明らかになった。しかしながら、Table 6 の年齢群別の情動領域間の相関では、情動の表現と情動の理解および共感との間の相関はいずれの年齢群においても正の相関がみられたものの、年齢が上がるにつれて相関係数の値が小さくなっていることがうかがえる。これらのことから、年齢が低い段階では他児の情動を理解したり、他児の情動に共感したりすることが自らの情動の表現を促進することにつながるものの、年齢が上がるにつれて、場面・状況と照らし合わせたときに適切な表現か否かといった情動表現の適切性の判断の影響も受けるようになる可能性が考えられる。さらに、本研究では保育者に対して個々の子どもの情動発達について、各項目に示された姿がどれくらいみられるかを「全くない」から「よくある」までの5段階で回答してもらうという方法を用いた。そのため、情動の表現に関する項目について「よくある」と回答された場合に、情動を表現できるという能力として捉えられたものと、情動を表現してしまうという抑制の失敗として捉えられたものの両方が混在している可能性がある。このことも、情動の表現と情動の理解および共感との間の相関が、年齢が上がるにつれて小さくなっていることと関連しているだろう。

(2) 性による情動発達の違い

Table 1 からわかるように、情動の抑制、情動の理解および共感について性差がみられ、男児よりも女児のほうが①自分の情動をより抑制すること、②他児の情動をより理解していること、③他児の情動により共感することが明らかになった。また、Table 4 からわかるように、自分の怒りの抑制、他児の怒り・悲しみへの共感については、4歳の時点では性差がみられないものの、女児では4歳から5歳にかけて顕著に増加するため、5歳・6歳になると性差がみられるようになることも示された。このことから、幼児期における情動の理解や共感に関しては、年齢だけでなく性による違いも踏まえて理解することが重要であると考えられる。

(3) 今後の課題

本研究では、幼児期の情動発達について年齢および性によるという点から明らかにしたが、本研究の結果は幼児期の情動発達に関する基礎的データを示したに過ぎず、情動の様々な側面がどのように関連し合いながら発達していくのかについては十分に検討されていない。本研究では、4歳から5歳にかけて自分の情動をより抑制するようになることが明らかになったものの、Table 5 からわかるように情動の抑制は他の情動領域との間に有意な相関はみられなかった。これは、他児の情動の理解や他児への共感の高まりが情動の抑制につながるというような、単純な関係ではないことを示す結果であると言えるだろう。たとえば、幼児期・児童期の「気になる」子どもにおいては情動の抑制の難しさが指摘されている（本郷ほか、2016；本郷・平川・飯島・高橋・相澤、2019）。本研究の結果を踏まえて考えると、このような情動の抑制に困難を抱える子どもの支援においては、ただ単に他児の情動の理解や他児への共感を促すような支援では情動の抑制につながらない可能性があり、その他の要因を考慮することが必要になるだろう。また、Table 6 の年齢群別の情動の領域間の相関をみても、年齢が上がるにつれて領域間の相関が全体的に小さくなっていることから、年齢の増加とともに情動以外の要因の影響が大きくなり、情動の各領域の独立性が高まっていく可能性が考えられる。したがって、今後は、情動の様々な側面が相互にどのように関連し合いながら発達していくのか、認知や言語、対人関係などの情動以外の様々な要因の影響を受けながら、どのようなメカニズムによって発達していくのかを明らかにする研究が求められる。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

文献

- Campos, J. J., Campos, R.G., & Barrett, K.C. (1989). Emergent themes in the study of emotional development and emotion regulation. *Developmental Psychology*, 25, 394-402.
- Denham, S. A., Blair, K. A., Demulder, E., Levitas, J.,

- Sawyer, K., Auerbach-Major, S., & Queenan, P. (2003). Preschool emotional competence : Pathway to social competence? *Child Development*, 74, 238-256.
- 本郷一夫・飯島典子・高橋千枝・小泉嘉子・平川久美子・神谷哲司. (2015). 保育場面における幼児の社会性発達チェックリストの開発. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 64(1), 45-58.
- 本郷一夫・飯島典子・高橋千枝・小泉嘉子・平川久美子・神谷哲司. (2016). 保育場面における「気になる」子どもの社会性発達—「社会性発達チェックリスト」から捉える「気になる」子どもの特徴—. 臨床発達心理実践研究, 11, 85-91.
- 本郷一夫・平川久美子・飯島典子・高橋千枝・相澤雅文. (2019). 児童期の情動発達とその特異性に関する研究—「気になる」子どもと典型発達児の比較—. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 67(2), 15-22.
- 本郷一夫・平川久美子・飯島典子・高橋千枝・相澤雅文. (2020). 児童期における「気になる」子どもの行動特徴と情動発達との関連. 臨床発達心理実践研究, 15(2), 68-76.
- 本郷一夫・平川久美子・高橋千枝・飯島典子. (2021). 幼児期における情動発達と行動特徴との関連. 発達支援学研究, 2, 41-58.
- Lewis, M. (1993). The emergence of human emotions. In M. Lewis & J. M. Haviland (Eds.), *Handbook of Emotions* (pp.223-235). New York: Guilford Press.
- Manstead, A.S.R., & Edwards, R. (1992). Communicative aspects of children's emotional competence. In K.T.Strongman (Ed.), *International review of studies on emotion, Vol. 2* (pp.167-195). Chichester:Wiley.
- 森野美央. (2005). 幼児期における心の理論発達の個人差、及び仲間との相互作用の関連. 発達心理学研究, 16, 36-45.
- 仲真紀子. (2010). 子どもによるポジティブ、ネガティブな気持ちの表現：安全、非安全な状況にかかわる感情語の使用. 発達心理学研究, 21, 365-374.
- 清水寿代・鄭曉林・浦上萌・上山瑠津子・三宅英典・永野美咲・藤岡真紀・清水健司・杉村伸一郎. (2015). 幼児の感情理解と社会性の関連. 幼年教育研究年報, 37, 75-83.
- 富田昌平. (2017). 幼児期における恐怖対象の発達的变化. 三重大大学教育学部研究紀要, 68, 129-136.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ. (1986). 幼児の共感と母親の共感との関係. 教育心理学研究, 34, 324-331.